



JICA/JISNAS フォーラム報告

帯広—JICA 協力隊連携事業

帯広畜産大学にとっての JICA ボランティア事業の意義と課題

木田 克弥

Katsuya Kida

国立大学法人帯広畜産大学 教授

Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine

論文受付 2020 年 1 月 20 日 掲載決定 2020 年 2 月 14 日

1. 帯広—JICA 協力隊連携事業とパラグアイにおける活動

国立大学法人帯広畜産大学では、2005年2月に全国の大学に先駆け、獣医・農畜産分野の「国際協力に資する人材の育成」と「開発途上地域への国際協力」を目的に JICA と連携協定を締結し、本学学生を青年海外協力隊員として派遣するプログラム(タイ国やフィリピン国)や教員が専門家として参画する草の根技術協力事業(マラウイ国やパラグアイ国)、途上国からの研修員の受入れなどの事業を行ってきた。

2011年からは、これまでの連携活動をさらに発展させる目的で「帯広—JICA 協力隊連携事業」を開始した。現地における事業名を『イタプア県における小規模酪農家強化プロジェクト:FOPROLEI』とし、パラグアイにおいて大学の専門知識と技術を活用して小規模酪農家の生計向上を目指している。この事業は、小規模酪農家(乳肉交雑種数頭から手搾りしたミルクをペットボトルに詰めたりチーズに加工したりして直販)に対して飼料作物栽培、飼養・栄養管理、搾乳衛生、繁殖管理等について技術指導し、経営向上を図ることを目的とし、青年海外協力隊員として長・短期ボランティアをグループとして派遣するプロジェクトである。本学の卒業生や大学院生を長期派遣ボランティアとして派遣し、約2

年間、酪農家に技術指導を行う。さらに、在学生を短期派遣ボランティアとして夏季および春季休業中の約1か月間派遣し、プロジェクトの進捗状況すなわち支援対象酪農家の乳量・乳質、繁殖、飼料給与、経営状況について半年ごとにモニタリング調査を行い、報告する活動を行っている。

2012~2018年の第1フェーズでは、合計で長期派遣ボランティア12名、短期派遣ボランティア33名を派遣し、プロジェクト目標である『小規模酪農家の乳量を増やし、酪農家は市役所等の支援の下、集乳所を設置し、そこに生乳を持ち寄り、ロットを増やすことで乳業会社に買い上げてもらう』ことを達成した。その成果によって、2018年からは隣接地域において第2フェーズ(6年間)の活動を展開している(図1)。

2. JICA ボランティア事業(FOPROLEI)における短期派遣ボランティアの活動

派遣が決定した学生は、派遣前研修として、約4か月間、スペイン語研修をはじめ酪農に関わる調査技術や自身のセキュリティおよび家畜防疫などについて教育訓練を受ける。特に、学生が JICA ボランティアとして自ら課題を見つけ対応(主体的取り組み)できるよう、赴任に際して敢えて教員は同行せず、活動の最初の約



図1 FOPROLEIの活動年譜と活動内容

1か月間は長期派遣ボランティアと短期派遣ボランティアだけで調査させている。そこで、スムーズに調査を開始できるよう現地の状況を想定した実践訓練を行っている。

現地での調査活動の基本は、搾乳立ち合いと聞き取り調査である。すなわち、朝の搾乳時に搾乳衛生、乳質検査を行い、併せて乳牛ごとに繁殖履歴を聞き取り、また、同時に行われる飼料給与に立ち会い、飼料の種類・量などを調査する。搾乳終了後は、経営状況(家計)についても聞き取りを行い、宿舎に戻る。宿舎では、収集したデータを整理し、特に、半年前の成績と比較して酪農生産性がどのように変化しているかを確認し、報告書にまとめる。そして、翌日午後、農家を再訪問して報告する。このような調査・報告を派遣期間中に3市12戸の農家に対して実施し、さらに、派遣の終わりには、すべての調査データを集計・分析して報告する最終報告会を開催している(図2)。

これらの活動は、原則としてスペイン語で行っている。そのため、現地においては、JICAパラグアイ事務所のサポートはもちろん、短期派遣ボランティアの日常生活、ドライバー、そして通訳として、日系人の方に昼夜を問わない全面的なサポートを頂いている。そして、大学から支援教員が活動の最後の約10日間に合流して最終報告会に向けたデータの取りまとめをサポートしている。

3. JICA ボランティア事業の意義

教育機関としての大学にとってJICA ボランティア派遣事業は、日本から遠く離れた場所でボランティア活動を体験させるというグローバル人材育成の観点から、正真正銘の実践教育であることは言うまでもない。大学独自で学生にこのような経験をさせることは、ノウハウや資金面から困難であるだけでなく、特に、途上国における学生の身体の安全保障は、大学だけでは不可能である。JICAが構築してきたセキュリティシステムがあるからこそ、安心して学生を送り出せている。

また、短期派遣ボランティアでは、限られた時間の中で高度なミッション遂行が求められるため、学生たちは、JOCVとして日本国から派遣されていることを自覚し、時差ぼけなど様々な困難があろうと目標を達成する責任感と集中力を磨くことができ、さらに、活動地域の酪農経営が向上してくるさまを目の当たりにすることで、学生であっても産業構造を変革できるのだという達成感と自信につながっている。加えて、現地の人々との交流を通して価値観の多様性や柔軟性を身に着けるなど、グローバル人材としての素養を高めることにもつながっている。なお、在学生による短期派遣ボランティアと大学院生による長期派遣ボランティアへの参加は、それぞれ授業科目(海外フィールドワーク)として単位認定している。

JICA ボランティア事業での体験は、卒業後の進路にも大きく影響しており、酪農新規就農に向けた海外農



図2 FOPROLEIにおける学生隊員の活動

業研修に参加、南米に勤務地がある国際的企業に就職、さらに大学院に進学して休学または長期履修制度を利用して本事業の長期派遣ボランティアに応募、あるいは、いったん就職して専門的スキルを習得してから再び参加するという好循環も生まれてきている。

また、この帯広-JICA協力隊連携事業の取り組みは、受験生にとっても一つの魅力になっているようで、近年はこのボランティア派遣事業に参加することを志望動機にしている受験生も少なくない。

4. JICA ボランティア事業 (FOPROLEI) に対する大学の支援体制

学生ボランティア派遣に向け本学では各専門分野(スペイン語、家畜繁殖学、家畜栄養学、生産獣医療学、農業経済学)の教員で構成する支援委員会を組織し、学生の派遣前訓練とプロジェクトの推進に専門的立場から支援している。さらに、現地で市役所、県庁、JICAおよび大学で構成される会議(ステアリングコミティ)にも参加し、専門的立場からアドバイスを行っている。

5. 大学としてのJICA ボランティア事業における課題と対応

FOPROLEIでは、イタプア県および県内の3市に長期派遣ボランティアを4名、さらに半年ごとに短期派遣ボランティアを各4名派遣している。6年間続くプロジェクトに対し、2年ごとの長期派遣ボランティアと半年ごとの短期派遣ボランティアとを切れ目なく派遣することは必ずしも容易ではない。そこで、短期派遣ボランティアの派遣終了後は、活動成果を報告書として上梓するほか、日頃からこの活動を大学ホームページや学内にポスター掲示することによりPRしている。また、帰国報告会を開催したり、支援教員の授業の中で活動を紹介したりするなど、継続的な広報も行っている。さらに、派遣を経験した学生らによるパラグアイ式BBQ(アサード)に後輩学生を伴うことによる活動紹介も有効であり、短期派遣ボランティアの募集に際し、派遣を経験した学生の周囲(所属ゼミや部活)の学生からの応募が多いようである。

また、途上国とは言え学生が酪農産業発展のための技術支援を行い、成果を挙げることは容易ではない。そこで、専門知識を有する支援委員の教員が長期隊員からの質問に対応したり、支援教員自身が現地で課題

を収集して隊員の活動を通して解決方策を提案したりすることで、成果につなげている。

6. おわりに

帯広-JICA協力隊連携事業『FOPROLEI』は、帯広畜産大学の基本目標「食を支え、暮らしを守る人材の育成を通じて、地域および国際社会に貢献する」ことを達成するうえで、国内では到底なしえない素晴らし

い体験の場になっている。同時に、この事業は、現地酪農家の経営向上という成果が求められており、具体的な活動を行う大学の責任は小さくない。しかし、現地の取り組みは、農畜産学の単科大学である帯広畜産大学にとっては、得意とする分野であり、JICAおよび現地のニーズと帯広畜産大学の専門家集団および大学の人材育成におけるミッション、このすべてがマッチングしているのがFOPROLEIである。